

馬場孤蝶

追想の断片

追想の断片

夏目漱石君は長者の風のある人、客扱いのうまい人、人によって話をせられる人であった。雄弁の人は概して客には話させないものだが、夏目君は客にも話させ自分も話されるといふ方の人であった。私は明治四十年、森田君の家でお会いしたのが初めであった。私の宅へも二度ほど来られた、私も行ったがそう度々^{たびたび}は行かなかつた。

七月（大正五年）中旬、上田敏氏の葬式のととき式場の入口で一寸^{ちよつと}挨拶したきり、それから一度も会わなかつた。

漱石君は実生活では複雑な変手へんてこ古な生活をされなかつたが、ああいう人だから思想上ではいろいろの生活をせられた。實際当つた生活は割合に狭い。作物さくぶつの上に肉あり血ありと云う部分で十分でないということがあるとすれば、それは実生活に触れた点が余り無かつた所に原因することと思ふ。

作物、特に近頃の氏の作物を見て感服するのは、書いたところに抜目なく、此処ここにもう一句あつたらば好く分るだらうとか、此処にもう一行欲しいとか云う感じの起らない点である。私どもは夏目君の注意力の広く精密に

油断なく働いているのを見て感服するばかりである。

夏日君は癩癩かんしやく持ちだという話を聞いた事があるが、そう云えばそう云う所もあつたらうと思う。が、一方から言えば、多分腹の立つような心持ちになつて来ると、その感情を抑えずにわざと口に出して見ることをやっていられたのではなからうかと思う。

頓才とんさいのすぐれて居られたのは誰でも氣のつく事であると思うのだが、演説とか講演とか云うものを聴いた人は誰でも皆夏日君の到意とうい即妙の頓才に感服したことと思う。門下の某君が自身の小説の中に「子を作るのは awful

なことである、何となれば自分の伝えて居る一切のものが子に伝えられ、子は亦またそれを子に伝え、その子は亦その次の子に伝えると云う風で、親が有もっている凡すべてのものが永遠に伝えられて行く。子を有つのはオーフルなことである」と書いたときに夏目君がその某君に——「おれがクソをするとそのクソが野菜にかかり野菜が育って人に食われ、人の血となり肉となる。で、その人は亦子を作ると云うわけになる。故にクソの功果も永遠である、君の云う通りにすればクソをするのもオーフルだ」と言われた。で、その某君が夏目先生は他人の熱心を打ち消

そうとするように、恋愛のところへクソを持ち出したのは如何いかにもうまい、これにはひどく閉口したと話した事がある。

もう二年ほど前かと思うのだが、私は外濠線そとぼりせんの電車で
図らずも夏目君と一緒にになって、少しの間話をしたことが
ある。その時夏目君は自分の口髭くちひげと両鬢りょうびんとのいらが
をさして「こんなに白くなりました、でも頭の真中は黒
いのだが、この通り帽子を被ると肝心の黒いところは隠
れて白いところばかり出ます」と言って笑って居られた。

五十に近い私どもに取っては、ああ云う夏目君のよう

な理解力の豊かな人が知人の中からなくなると、甚だ淋しい心持がする。私が明治四十四年頃に、小説を少し書いたことがあるが、三田文学に出た「屈辱」に就いては夏目君が好くその作中の人物の心持を理解して門下の人々にも説明されたように聞いている。間接にも直接にも、私に小説を書けと勧めてくれたのは夏目君が一番度々であつたように覚えている。たびたび我々の行こうと思つた面ちようせいで教えを乞うべき人であつた夏目君の長逝は我々所謂文壇の老朽者に取つては特に損失である。

これは私ばかりの感じではなからうと思つのだが、夏

目君がもう少し若い時分から作者生活を始められなかったのは残念な事であった。一方に於てはなかなか花やかな筆もあつたのである。感情に於ても決して乏しい人ではなかつたのであるから、その盛んに流露するような若い時代に於て筆を執り始められたのであつたら、もっと盛んな作物が出たろうかと思われる。夏目君の作物の如何にも結構布置井然せいぜんとしていて、作者は何処どこまでも冷静であるといふところに何等かの不満を有つ人々があるとすれば、その人々は私どもと同じように夏目君の若い時分に作を始められなかつた事を残念と思

うであろう。

然しそんな事は隴ろうを得て蜀しよくを望むと云うことに過ぎないのであるから、我々は夏目君の与えられた丈だけのもので満足すべきである。しかも十分満足すべき価値のあるものを夏目君が遺されたことには概おおむね何人なんびとも異存はあるまい。

要するに夏目君は人物として見ても作品から見ても全く特別な上等品である。手のこんだ念の入った品物である。出来合では決してない。随ってこれから先も夏目君にひどく似たような人が出来ようとは思われぬ、尤もつとも

それには時代を考量する必要があるのではあるが。

夏目君のことでは、思い出せば色々のこともあろうと思うのだが、今さし当ってはそう細かなお話をするわけには行かない。で、私の著書の中に書いた夏目君の事を左に引用する——



先生に始めて拝顔の栄を得たのは、明治四十年の冬頃かと思う。場所は、その時分森田草平氏の居た本郷の丸山福山町四番地——故樋口一葉の住んだ家——であった。

その時に僕が受けた印象は、先生の態度は、話し振り等に籠って居る或る物が、故中江兆民ちようみん、斎藤緑雨りよくうの態度、話し振り等に籠って居た或る物と同じであるという印象であつた。二人の故人に共通であつたウイットとしての風趣、即ち何処どこか飄逸ひよういつとでも云つて宜いような趣が漱石先生にもあるように感ぜられたのだ。が、その感じは、漱石先生に僕が始めて拝顔の榮を得た時の感じであつて、今日ではそういう感じは殆んど無くなつて居る。今日では漱石先生の寛大な、温藉おんしやな方面が、より多く僕には感ぜられる。



漱石先生が帝国大学の学生で居られた時分には英文科の先生の組の学生というのは先生一人きりであった。所へプロフェッサア・ウードが英文科の教師として渡来せられた。ウード氏が始めて大学へ出席された日、漱石先生に教科書かれこ彼此は相談の上極きめるから旅宿の帝国ホテルへ来て呉れと云うのであった。で漱石先生は外国人を訪問するのだからというので当時の日本人の考かんがえで能できるだけハイカラに仕立てて帝国ホテルへ出懸けた。尤もつとも当時のハイカラは今日の蛮ばんからで漱石先生その日のお

ん出で立ちというものはその時分流行った縮の——節
は夏である——折襟の前は紐で締めるようになって居る
襯衣の上に直接にフランネル金釦附の制服を着して居
られたのだ。所でホテルではボーイに案内されて行く
とウッド氏の寢室へ連れて行かれた。奇異な所へ案内す
るものだとは思ったもののそういう習慣もあるものかと
思つて室へ入るとウッド氏は「フン」とか何とか云つて
一向に挨拶もせず室にある革篋かばんに指をさした。漱石
先生には一向何だか合点が行か無かったが多分は革篋の
中には書籍が入つて居るから開けて出せ、そうした上で

いろいろ相談しようという意味であろうと推察したので、直ぐ立寄って跪^{しゃ}がんで革篋の蓋を開けた、所が中には襯衣だの衣服の古いのなどが一杯入って居るきりで書籍らしいものは影さえ無い。何^どうした事とも解らぬので、蓋を両手で押し上げたままでウード氏の顔を凝^じ乎^っと見あげて居ると、やがて氏は傍へ来て蓋に手を掛けて元の通り蓋を為^しようとするので漱石先生は直ぐに元の通りに蓋を下した。とウード氏は又^{また}蓋に手を掛け開けようとするので漱石先生も一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には何の事やら一向に解らぬ。そういう同じ事を二度三度繰り返

返した後で漱石先生も堪こえ兼ねて、これは一体何ういう訳なのかと尋いた。ウード氏は「錠前が毀こわれて居る」と云う。漱石先生はますます解げせず「錠前は成なる程ほど損じているがその錠前の損じて居ることと我輩との間に何等の関係があるのか」と斯こう哲学的に尋ねた。するとウード氏は「でも御前は錠前直しだろう」と云った。漱石先生ここに至って憤然と立ち上って「否」と答えた。所でその「NO」なるものが如何いかにも激烈な調子で云い表わされたものなので、漱石先生その如何に錠前直しと呼ばれたのを憤っているかが明あきらかに知り得られたからウード氏

は少時呆れて漱石先生の顔を見て居た。がやがて「君はそれでは何ういう人なのか」と尋いた。「イヤ自分は文科大学の学生で、こうこういう用向きで来たのだ」と漱石先生が説明するというと、ウード氏おおい大に慌てて「ヤアそれは飛んでも無い間違いであつた。実は錠前直しを待ち受けて居た所へ入って来られたので、一凶にそうと思つて誠に何うも失礼をした。疎忽そこつの段は幾重にも勘弁せられ度たい I beg your thousand pardons」という様な事を云つて、改めて漱石先生を応接室へ通らせて書籍の相談を為したといふのである。一体ならば前日教場さしむかで差向い

で話を為たのであるからウード氏は漱石先生の顔を覚え
て居るべき筈であるがウード氏は日本へ来たての西洋人
に有勝ありがちな通り日本人の顔が皆同じに見えて区別が付かな
かったので斯ういう間違が起つたといふのである。漱石
先生の云わるるには、その後西洋へ行つてから考えて見
ると自分の当時の服装は西洋人の眼で見たら何うしても
錠前直し相当のものであつたといふのだ。

この話は僕等のようなウード氏によし半面でも識ある
ものには特に面白い。あの人柄とつべんな訥弁なウード氏が初め
漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と後の慌て方

とが何と無く眼前にチラ付くような気がするのだ。



これは明治二十三年の秋かと覚えて居るが、本郷の若竹^{たけ}へ越路^{こしじ}が掛かった。漱石先生はその時、令兄より拝領の外套——中古ではあるが仕立のなかなか良い——を着^{ちやく}せられて大分得意で聞いて居ると、傍に安座^{あぐら}をかいて居たへんな男が「今日は休みか」と尋^きいた。漱石先生は無論先方が此方^{こちら}を学生と認めてそう尋^きく事と思つて「今日は休みだ」と答えた。それから先方がいろいろのことを尋くので相当の返答を為て居ると段々話が喰い違

って来るようになって、これは少し異様へんだなど思っているうちに到頭先方から判然はつきりと「お前は造兵ぞうへいへ出るのか」と尋いたというのだ。この話は漱石先生が前の話ほど描写的には話され無かったので是れ切りしきや書け無いが何にしろいろいろな者に間違えられたものでは無いか。

これは明治四十年頃のこと、漱石先生の今の早稲田南町の家へしかも庭先へ入って来て先生に逢い度たいというものがあった。先生が出て見られると椽先に十四、五の少年が立って居る。「用は何だ」と尋くと懐から英語読本を出して、「読めぬ所があるから其所そこを伺い度いのだ」

という。先生が「お前は俺の所へ来れば分かると思つて来たのか、それとも当て無しに来たのか」と尋くと「多分分かるだろうと思つて来た」というのだ。——この問答では漱石先生の方が負けたという評である——で又「これから毎日尋ききに来る積りか」と問うと「いや今日だけで宜いいのだ」というのであつた。で少年を椽えんへ腰掛けさせて置いて英語読本の鳥が木の実を啄つつくというような所を読んで遣つた。前後を見ると一面に仮名が付いて居る。鳥の所ばかりは仮名無しであるので何処でか習つて居るのかと尋くと、何処か牛乳屋かなんかに奉公して

居て大学生の所へ夜学に行くのだが鳥の部分だけは欠席して抜けたので尋きに来たというのであった。少年は一、三ヶ月前に田舎から出て来たものであったそうだ。夏目氏の直話を聞いた時には非常に面白く思ったが僕の取次では何うも十分にその興味を伝えることの能きないのは残念である。



これは又また聞きぎの物語であるのだが、漱石先生が帝国大
学で教えて居られた時学生の中に一人何時いつも隻手かたてを懐に
したまままで講義を聞いて居る者があるのに漱石先生は気

が付いた。一面に於て潔癖な几帳面な漱石先生は、その学生の姿勢が甚く癩ひどに触つたと見えて、或る日の講義中に講壇を下りその学生の傍へ行つて「手をお出しなさい」と少し鋭とがつた声で云つた。学生は顔を赤くしたのみで何とも返答せず又手も出さ無い。漱石先生更に強く「手をお出しなさい」と云つた。が学生は一層赤くなり魚の如く黙して居るのみでどうしても手を出さ無い。夏目漱石先生も為方しかたが無いものだから講壇に戻つて如何にも不機嫌嫌そうな様子で講義を終つた。

とその後になつて何時も手を懐に入れて居た学生の友

人が漱石先生の家へ行つた。そうしてその友人は、その手を出さ無かつた学生は手を怪我して居る男なので手を出さ無かつたのでは無くして手が出せ無かつたのだと漱石先生に向つて説明した末にその友人は「下世話にも無い袖は振られ無いと云うではありませんか」と警句一番した積りで云つた。

真面目な漱石先生はその学生に対して甚ひどく気の毒がつた。が重厚なる紳士漱石先生は唯ただまことに悪るかつた。気の毒なことを為た先方へ宜しく僕に代つて挨拶して呉れ給えと云うような意味のことを云うだけでは——普通

の人がそういう場合には大抵云うようなことを云うだけでは——漱石先生自身気が済ま無かった。漱石先生はこの際自分をも笑って了^しまい度^たかつたのだらう——伝者はそう云って居る——漱石先生は渋い顔をして斯^こう云った

「僕等は無^ない学問を出して講義を為^なし居るのだ。……君も気が利か^なんでは無いか。無^ない手位出^なして呉^なれても宜^ないの^なに」。

（『新小説』臨時号、大正六年一月）

日本文学電子図書館

追想の断片

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館